

鳩谷八幡神社

鳩谷八幡神社は、白川で最も古い信仰の場の一つと考えられている。神聖と俗世間の境界を示す鳥居の向こうには、古代の自然崇拝の一端を担っていたと思われるいくつかの自然がある。

拝殿の正面にある岩は「依代（よりしろ）」と呼ばれるもので、神様を呼び寄せ、神事の際、その魂が宿る場所として機能していた。また、境内の大杉も依代だったと考えられている。拝殿の正面から見て右側には、小さな木が輪になっているが、これは「祓戸（はらえど）」と呼ばれる、お祓いをする場所である。

鳥居をくぐった先には湧き水があり、この場所が神聖視されるようになったきっかけとされている。水は、雨乞いをして神に祈願したのである。この地域では水の神と、近くにある白山の神は同義とされている。白山は周辺の谷間に水を分配する重要な役割を今も果たしており、白山の神を祀った神社が庄川流域に多く残っている。

鳩谷の神社で武家の守護神である八幡を祀るようになったのは、16 世紀に武家が支配を強めてからであり、水の神様が元々の信仰対象であったと考えられる。